WASON
HQ
1104
J74+

驛遞局認可

明治十九年七月十五日發行

大附錄（コレラ病の心得並ニ女學雜誌總目錄）あり

毎月三回發兌
一冊正價四錢
一ヶ月十二錢

女學雜誌

第貳拾九號

東京 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

驛遞局認可

大附錄（コレラ病の心得並ニ女學雜誌總目錄）あり

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

WASON
HQ
1104
J74+

驛遞局認可

明治十九年七月十五日發行

大附錄（コレラ病の心得並ニ女學雜誌總目錄）あり

每月三回發兌
一冊正價四錢
一ヶ月十二錢

女學雜誌

第貳拾九號

東京　女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

A. Matsu-kage ni Iwai no midsu wo musubi-age te ;
Natsu naki toshi to omoi keru kana.

B. There is on earth a thing more bootless still
than to write figures on a running stream:
And that thing is (believe me it you will)
to dream of one who ne'er of you doth drem.

女學雜誌第貳拾九號目次

●社説　酒毒の遺傳（レビット夫人）
女子と小説（中）
●新報　十則
●論説　女子敎育策の一端（中島とし子）
●叢話　紅蘭夫と愛せし事○西洋禮式第九食事の禮○言ハ行にしかず○夫婦の心得
●佳傳　江口の白妙珠玉を沈る話○アウガステン母モニカの傳
●寄書　婦人の德義
●廣告

●珊瑚の玉（七）

●心志高潔なる婦人もその夫の品行をして自ら貴からしめ性質卑汚なるものも其夫を化して自ら賤しからしむるものなり（トクウビル夫人）

●英國の海軍に名を轟したるネルソンは侏儒の嘲をうけたり○ナポレオン一世ハ身の丈ひくし○ソクラットの鼻ハ平かにして天を仰ぎ眼は突出して唇は大且つ厚かりし○詩人ホウプは身の丈ひきく且つ曲れり○アリストートル又身短し○安井息軒は一目にしてまた見る可らず○如此き醜男子みな大學士大英雄とある

●夏傑は妹喜を以て滅び、商紂は妲妃を以て滅び、衛靈は南子を以て滅び、扶差は西施を以て滅び、唐高は武氏を以て滅び、明皇は貴妃を以て滅ぶ

甲。松影にいは井の水をむすひ上て夏なき年と思ひける哉（惠慶法師）

乙。ゆく水に文字かくよりも果敢なきハ思ぬ人を思也けり（讀人不知）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第貳拾九號（明治十九年七月十五日）

●社説

○酒毒の遺傳（其二）　マーリー、レビット夫人

酒癖を遺傳したる者ハ其幼時其少時其壯時のいづれに於て全く酒をとることなかりしとも万一醫師の指圖り晩餐の聖禮よか又ハ笑顔を呈すものありて妾と一杯の樂をとれと云へるときより試に其一滴を口よそることあらんにハ遺傳の酒癖則ち勃出して死せざれハ亦た禁ぞること能ハざるに至るべし嗚呼母たるものよ君等ハ其料理中にブランデー又ハ葡萄酒を用ふることを廢し能ハざる乎醫師又ハ牧師足下卿等ハ一家族の尤も信任し尤も尊敬ぞるところなり美麗ある娘孃諸子君等が感化力ハ他の人よりも恐くハ更に強大なる所あらん然も尚ほ此の焔氣に火を点して人を酒癖の慾に燒死せしむることを敢て爲し玉ふ乎

酒を節ぞる所の人其男たると女たるとを問ハず若し自ら辨じて己れ多年日々に飲酒すれどもそれが爲に害毒を蒙りたることなしと云ふものある歟其人等宜しく思ふべし數多の有名なる醫師ハ皆な下の如く言へることを曰く量を節して日々飲酒する所の人ハ其害毒を子孫に傳ふること彼の時に飲酒して大に酩酊ぞるものゝ害を遺すよりも甚し故に一生中未曾て酩酊せぜ能く之を節する者と雖も其人の腦肉尚衰弱ぞるが故にかの衰弱、諸の酒性病、愚鈍、狂氣質、偏屈、不經、多慾、不正、等の性質を其子に遺傳するハ彼の純然たる大酒人が其子よ遺傳ぞるの趣と毫も異る所なしと

嗚呼諸君、卿等たとひ酒を節ぞれバ其身よ害なしと云つて日々之を飲玉ふとも何んぞ其子に如此き害毒を遺傳するの害を恐れて之を禁じ玉ハざる

兩親飲酒して其害毒を子孫に遺傳すると既に之を悉せり然れども更に問ふべし兩親のうち父か母かいづれか其害毒を傳ふるところの子の親たると相異らぞと雖も子生れて全く親よ頼るの間特に尤も強く且つ尤も悲しむべき曰く母なりろもく母ハ父と共よよ生れ出でゝのち一年を經るの間ハ之を養ひ之を育くむもの即ち母なり故に此間に於て母の血脈に存ぞるものハ悉く出でゝ其子の血脈よ入るべし倫敦の博士エドモンド曰く婦人の子に於ヶる如此きものなるが故に其子の肉体の壯健なるや否やに就てハ母たるものゝ責任ハ父よこゆる所あり此際母もし夜間酒精一二杯をとり晝間に葡萄酒一二杯又は強麥酒二三ピントを取り以て其子と養ふの力を生ずと云ふか酒精分ハ其乳汁に混じて子の体内に入るべし此母や今正に生成する愛子の身中に永遠に續くべき酩酊の氣を其胸よりして吹き入るゝものと云ふべしと己なみ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

玆に至りて吾が母の愛を思ひ今わが母を思ふときハ數多の記臆あり己が母ハ其子供等の爲には其身の便利其身の嗜好を悉く棄て玉へり己が母ハ其子供を敎育せん爲に非常よ苦痛なし玉へりわが父田舍の牧師よして給料も多からざるにわが母ハ之を尤よく節儉して其子供等を學校に送るべき學資を貯へ玉へり嗚呼神はわが母の如くすべての母人をも惠み玉へ母たる人々よ卿等ハ一時の滿足の爲に此の尤も不幸なる害毒を其子に遺傳することを敢てなし玉ふ乎

嗚呼飲酒の害毒を子孫に遺傳すると如此く明なり吾等ハ肉体れ諸病、心神の諸疾を遺傳すると皆悲しむべしと思へり然れども尤も悲しむべく又尤も不幸なる遺傳ハかの酒の爲に增加したる動物の情慾、酒の爲に墜落したる下卑の汚行、及び、酒の爲に道德を顧ざる、宗敎の念の薄らぎたる、宗敎上の義務を感ずる力の減したる、之を一言すれバ神と吾が靈魂との間に墻壁といよ〳〵高く且つ厚くそべき者と其子に遺傳するよあり

吾等の母たり姉妹たる人々よ卿等其身を愛してその自ら禁酒し州の爲に禁酒せんとする會合の場所に止り又は之が爲に熱心有爲なる働き手となることを承知し玉ひしぞともかの愛すべき罪なき子供等の爲に之を敢てし吾が主が孩提を我に來らせよ彼等を禁むる勿れと言ひ玉ひたる御敎を遵奉し玉ハざる乎

●

○女子と小說（中）

小說の作者たらんものハ何如ある性質あるを要する乎古來さま〴〵の議論ありて固より一定の規則なしと雖も吾人の密かに考ある所によれバ大抵三つの性質をば特よ之に要するやう思ハるゝよしあり所云る三つとハ一に想像に富むことなり二よ觀察のふかきとなり三に覺知の鋭きとなり此等れ性質兼ね備ハりて初めて完全なる作者と云ふべき歟」今ま小說中に山川の景色を寫し名勝古跡の有樣を述べ讀者をして身其所にあるかと思ハしめんにハ作者の想像よく之を畫き亦その觀察力よく之を寫し出すにあらざんバ出來がたし有を無に生じて空中に樓閣を設け英雄才子佳人秀才盜賊惡人仁者義人一々ろの性質をあらハして小說の紙面に躍り出でんことも亦これ作者が想像の力を要する所あり當今の有樣をうつし人情の微を穿ち讀者をして恰も活世界に出でゝ身そづから其事に會するやうに思ハせ悲しむべきとハ悲しませ喜ぶべきとハ心實に喜バすなんど作者が覺知と觀察との力を要するところなり。故に小說のよく人情を穿つをよしと云ふかよく人情を穿たんにハ人間のへるときには何如よなそらん

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

との趣を想像し實際かゝるときは何如になすものなりやを觀察しその時もし吾あらんには何如に感覺するならんと思ひ作ら早くも之を心に覺知する此の三つの力に富めるものは即ちよく人情を穿つものなり。また小説の趣向よきと以て可なりとするか趣向の上下は想像の多少によりて分るゝこと多し。小説の實際に近きを以て宜しとするか實際に合ふと合はざるとは觀察の厚薄によりて來るところ多し。或は亦小説の人を感動するを以て味ありとするか感動を起その多少も作者が覺知力の濃淡によること多し。ゆえに此外作者も能文ならざる可らず情あつき質ならざる可らざるなんどの事もあらんがすべて之を要する時も大抵前述せる三の性質ある者を以て高等の作者と見做し得べきが如し然らば女子は小説の作者たるに適せるや否やこゝも亦いろ／＼の議論もあることなるべし然れど吾人の私考にも女子の作者たるに適するは勿論時としては男子にまさることあり亦男子と作者とするよりは之を女子の一藝とせる方種々の利益あるやうに思はるゝ趣あるなり」先づ女子の想像力は何如ん今日の有様に就て之を云へば廣大壯嚴のけしき異常快濶の有様なんどを想像するに至りては女子決して男子に及ばずと雖ども人情の隱微なる所ろ情緒の變化するさまなどを想像するに於ては遙かに男子にまさることあり實際の世話にも邪推は女に多しと云ひ男子の推測多きは女の如しと云へり邪推又は推測の低きものは固より望む可らざれども此は必竟教育の足らざるよりのことなれば若し教育高からんには推察推測の性質も自ら高うなるべし故に男女の性質に就て之を言はゞ女子の想像力は男子にまさるとも決して劣ることなしと斷ずるは敢て不都合の議論にあらざるべし

●新報

○女子大學入校　の出願ありし趣は前号に報じ置たり抑も此事は歐米にても種々議論ある由なれども吾人は男女を共に教育すべきやう大學の課程を定るは双方に不利益なるべきことゝ信ぜるものなり左ればとて大學に入校せんとせる女子の願を聞届くまじき理由は無論あるまじき筈なれば吾が文部大臣は必ず之と許可さるゝならんと想像したり然るに傳る所によれば此度彼兩人へ對し撰科修學の事丈は許可すべきやう指令ありしときけり是れ切ても佳報なるべしとは云へ吾人は女子大學の別に設置なき間は之をして共に帝國大學に入らしめんことを希望する者也

○さいこドン／＼　ナンダイ節やゝ廢れんとしてまた流行かけたるさいこドン／＼の歌は是亦野鄙にして聞く可らざ政府にて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小學一派に唱歌の一課を置きかゝる野歌を兒童の傳唱せざるやう取扱るゝやに承れバ吾人ハ其一日も早く行れんことを切望して止まざるなり

○海軍結婚條例　ハ已に發布の運に臨み居たる處元來其草案ハ幾に發布になりし陸軍の結婚條例に對照して起稿せしも海軍々人ハ志願兵より成立ち陸軍とハ大に其趣を異にする所も少からざるにより更に英國及び和蘭の海軍々人結婚條例を參酌折衷して追加と加へられたれバ近々内閣の推准を經てのち發布さるゝならん（七月一日燈新聞）

○愛生社員　東京成醫會に於て今度設立したる愛生社員（各海軍々醫夫人）ハ去る一日午後二時より規則等協議え今後毎月第一木曜日に例會を開くことゝ定め夫より役員を撰擧せしが當日集會の夫人ハ八十五名にて社長に高木富子、副社長に加賀美繁子、矢野石子、幹事に寶吉廉子、川村幸子、島田琴子、鈴木米子、村瀬綱子、三田村重子が撰擧されたるよし

○婦人智識交換會　曾て工部大學校を卒業したる各學士中村貞吉、藤本壽吉、其他諸氏の夫人一同と去頃より智識交換會なるものを發起し毎月一回輪番に各自の宅に集會する由なるが近頃ハ追々會員の數も增加する由なり（七月一日時事新報）

○東京府レース製造場　にてハ例により生徒の技藝を試驗の上去月二十九日三十九名に卒業證と授與されたり此内全科卒業の人ハ七名なりと。因に云ふ本誌第二十七号に同場の報告を載たるうち誤あるよしにて左の如く正せよと申し越されたり

生徒の現數ハ五十六名。卒業生ハ五十六名外に此度七名。玉吉ハ三吉なり

○明治女學校　ハ生徒追々に增加し過日も新に寄宿舍を設けられたる程の處此度又た九段公園内元物理學校跡を借受て講堂とさるゝよしなり尙此の十日より十六日迄定期の大試驗あれバ次号に其成跡と報ずべし

○リンダリチャード女　ハ京都の看病婦學校の聘に應じ目下岡山縣備前國門田村ギユリキ氏方に滯留さるゝが關西地方の虎列刺病日一日より蔓延し既に岡山の如きハ流行地と認められたる由をきゝ深く之を憂ひ親ら避病院の看病婦たらんことを岡山縣廳へ出願ありたるよし（六月廿九日每日新聞）

○万國婦人禁酒會支部　を開かんとて横濱の外國婦人等專ら盡力さるゝよし我國の貴婦人方も可成助力ありて其速に設立さるゝに至らんことを望む

○外國婦人の旅行願　石川縣下金澤なる靑木仲英氏の學校に於

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て昨年來英語を教授さるゝメレー、ケー、ハッセル及サイナボーレルの二婦人にハ學術研修の爲め本月より向ふ六ケ月間同縣下ハ勿論富山縣下及び東京府下近傍を旅行したき旨其筋へ願出たるよし(七月一日毎日新聞)

○貧婦十二人の足を洗ふ　墺國の皇后ハ毎年一度年老の貧婦十二人は足を洗ひ以て憐憫の意を表するを例とせり今年も四月廿二日に此典例を行ひたるが此日先づ貧婦十二人に朝餐を與ふる爲め十二の婦をして御賜の黒衣を衣て座に入らしめ食器ハ白銀の刀叉杯盤を用ひたり(是ハ各自持ち歸らしむる例なり)頓て太后ハ手づから飯を傳へ又近侍として四品の菜を捧げ出させ食事了りてのち毎人白布を以て其膝を覆ハしめ一列に居並バせ置き即ち太后手づから水を用ひ其足を拭ひ了りて又銀一包づゝと賜ひ其宅に歸さしめ玉ふ(七月七日朝野新聞)一國の皇后にして此行あり昔し基督が師徒の足を洗ひて汝曹互にかくすべしと命じ玉ひたるハ吾人みな常に覺悟して之を行ふべき者なり

○ランドルフチヨルチル卿の夫人　英國の保守黨中にて壯年血氣にして最も活潑の聞へある政治家ハランドルフ、チヨルチル卿にして近來ハその名聲ます〱高く人皆な望を後來に屬する事なるが卿が政治世界に立て今日は地位に至りたるハ全くその婦人の內助によるものなりといふチヨルチル夫人ハ獨りその容貌の美麗なるのみならず學問智識共に卓絶にして英國の政治及歷史を識ること尋常の國會議員などの及ぶ所にあらず其一例を擧ぐれバ夫人ハアルフレット大王より今代のヴヰクトリヤ女皇に至る迄の代々帝王の名其治世の日月、其各時代の間に起りたる大なる出來事ハ勿論、其他米國獨立の檄文の如きも始より終まで一語も誤りなく暗誦し居るといふ夫人ハ米國ニユーヨークの產れにして數年前まではニユーヨークの交際社會にて其名最も高くゼンニーゼロム孃といへば誰れ一人も知らぬ者とてはあらぬ程なりし一年チヨルチル卿が米國に客たりし時ニユーヨークの夜會に於てはじめてゼロム孃に面會したりとの時孃が頭上に戴きし金釵の誤て床の上に落たりしと卿ハ傍にありて之を拾ひ取り懷中に納めたるが此時よりして兩人ハ互に思ひ思はれて遂に幾許もなくして金釵の緣と了するに至れり夫人ハ今年二人は子を持てるが倫敦の交際社會にては夫人の聲譽愈々盛にして女皇皇太子妃の宴會にハ無論其他の宴席にハ何れも夫人と仰て上客となし夫人の衣裳、束髮の風より其一擧一動ハ總て交際社會の摸範となり人々爭ふて之を摸倣するに至れりといふ(七月八日時事新報)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○料理人の給料　現今府下の各料理店にて雇入るゝ料理人ハ月給ハ上等十五圓ヨ庖丁代三圓以下、中等十三圓に庖丁代二圓以下、下等十圓に庖丁代一圓また其洗方は上等十二圓以下、中等十圓以下、下等七圓以下、また其洗方は上等三圓余、中等二圓、下等一圓五十錢位にて右料理人洗方等の現數は凡そ千二百八十余人あるよし（七月三日報知新聞）如此き職業は追々女子の專とする所となしたきとなり

○婚姻ハ多少　一國の人民一千人に付一年の内に婚姻する人數を割出し其分割を見もつて各國婚姻の多少を卜する法あり之を婚姻度數の計算と云ふ近頃博士ス▪ス氏が取調たるものと五月廿七日の米國インデペンデントに載せたると左の如し

セルビア	一一、三	フランス	八、〇
ハンガリー	一〇、五	スヰツルランド	七、六
ゼルマン	九、五	イタリー	七、六
サキソニー	九、三	ベルジウム	七、五
ウルテンボルグ	九、二	スペイン	七、四
バヽリア	九、二	スコツトランド	七、二
プロシア	八、九	ノーエー	七、〇
アウストリア	八、七	スエーデン	六、六
イングランド及エールス	八、四	アイルランド	五、一

斯て此の多少より推して產兒の多少を測知し得ると云へり

○レビツト夫人演説　同夫人が當二日及五日の演説は前号に報じ置たり其后去る九日の夜は芝露月町會堂にてまた又禁酒の演説ありたり右三回の演説は何れも有益にして聽衆を感動せしめたると多けれども就中五日の夜本郷にてありたるは主意も演辞も非常にて感動の極に至れる者甚多く同夫人自分にも其夜は甚だ自由に述べ得たるよしを喜ばれたる程なれば吾人は社友林君がこれ全体を速記法にて筆記したるを次号より掲載すべし

●厚生館女學演説●弊社は右レビツト夫人が一婦人にしてよく世界を周遊し到る處禁酒敎德の演説を爲して聽衆を大に悔改せしめ玉ふ熱心と誠實とに感ぜると切なり故に今回同夫人に請て明后十七日午后三時より木挽町厚生館に女學の演説會を開き傍聽は女子に限り通弁は橫濱フエリス女學校の島田かし姉に委頼し我姉妹諸子をして一婦人尚よく爲すあるに足るの實を觀せしめ且つ諸子に切要なる數多の敎を聽かしめんと望む本誌愛讀の姉妹は一人をも多く伴ひ來館あらんことを希ふ

因に云ふ同夫人は前回に報じ置たる約に隨ひ日本の姉妹に告ぐてふ主意の一篇を寄送ありたり後号に譯出して覽に供へん

○音樂演習會　去る十日午后一時より文部省上野官舍に於て同會を開かれ音樂取調所の敎師生徒がた打集ひて數多の音樂唱歌

を演習ありたりルーツー（洋琴）の幽靜なるポルカ（管絃）マーチ（洋琴）の勇壯なるグランドソナタ（洋琴）の變幻なる吾人を大に感動せしめたりかつて述べたる如く音樂は人の心情を動すに最も宜しきものにて理屈もて說く可らざる議論にて屈せ可らざる頑固の心も洋和たる清音をきゝて乍ち發心すること屢ばあるならひなきは女子にして愛國心を鼓舞せんと思ふか又は同胞の憂苦罪惡に慷慨せんとするなどにはすべて之を音樂に訴ふるの宜しきに及ぶものなし故に吾人は如此き目的を以て音樂を修る所の女子あらんことを希望するの念甚だ切なり密に思に音樂の性たる既に如此く人を動その力あり故に之を利用せんか國家の大利なり若し之を害用せんか淫猥の風を起し無用の人を造る實に易々たらん故に吾人は音樂を修るものゝ道德高からんことを希望するや亦甚だ切なり然るに此頃音樂取調所の課程表を見るに修身の科小學論語の類を用ひて其他の敎なきが如し吾人は儒教が文明の音樂に助なきことを思ふと共に儒教がよく音樂者の道德を高むるに足らざることを信ずるもの也

○辻高小學校　美作大庭郡同校の木村要平氏は女子敎育熱心の趣にて近來は其校の女生徒に家事經濟幼兒保育等の敎を傍ら講述さるゝ由同地より來報あり他所にも行はせたき佳報なり

● 論說

○女子敎育策の一端（第一篇ノ三）　中島俊子

○○第五唯其意ノアル處ニ任ゾ敢テ敎戒スル處ナク漫リニ恣縱驕傲ナラシムルノ不可ナルハ素ヨリ論ヲ待タザルナリ然レ圧又餘リ一起一行每ニ叱咤敎警シ人ヲ見レバ則チ再三低頭ナサシメ物ヲ受レバ則再三低頭ナサシムルガ如キハ英氣ヲ殺ヒデ卑屈心ヲ培養セシムルモノナリ世間間マ卑屈ヲ以テ順良トナシ順良ト卑屈トヲ混シテ區別ナキモノヽ如シ順良ハ素ヨリ可ナリ卑屈ハ素ヨリ不可ナリ順良的ナルモノハ即チ活潑的ヲ含有スルモノニシテ卑屈的ハ活潑的ヲ含有セザルモノナリ故ニ活潑ナラザレバ順良ナル能ハザルナリ試ミニ其最モ分リ易キモノヲ取リテ例セン茲ニ人アリ女子ニ事ヲ問フトセンカ若シ其女子ヲシテ順良ナルモノニアラシメバ則其知ルヲ知ルトシ其知ラザルヲ知ラズトシテ而其知ル處ヲ說キ其知ラザル處ヲ質ス而其聞キシ處ノモノ、解スルト解セザルトヲ明カニシ其聞シ處理アリトセンカ乃チ從ヒ不理トセンカ乃チ質ス是レ最モ順良ナルモノナリ以テ之レヲ順良ナリトスル時ニハ即活潑ハ將ニ順良ナラシメントスル前ニ於テ既ニ入用ナルモノニシテ謂ユル順良的ハ活潑的ヲ含有スル所以ナリ卑屈ハ悉ク之レニ反シテ問ヒニ遇フモ敢テ答ヘズ聞ク可キモ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

アヱテ聞カズ全ク不順良ノ形ヲ似ス是レ驕傲ヨリ生スル處ノ不順良ナルモノニ非ズシテ不活潑ヨリ生スル處ノ不順良ナルモノナリ故ニ特ニ警戒セザル可カラザルモノ、外ハ餘リ一事一行每ニ叱咤ヲ加ヘテ恐怖心ヲ生セシムルハ極テ害アリ小事ハ其意ニ任シ英氣活潑ヲ培養シ其英氣活潑ヨリ生シタル順良ノ女子タラシムノ傾向ニ教誘セン事ヲ世ノ父母ニ望ム第五ナリ

以上説ク處ハ別ニ新奇妙説以テ人ヲ驚スニ足ラザルノミナラズ且ツ啻ニ女子ノミニ限ラザルモノ、如シ然レ𪜈余ハ唯新奇妙説以テ人ヲ驚カサンヲ望ムニ非ラズ且ツ幼少ノ家教ニ於テ別ニ男女ノ區別ヲ定ムルニ及ハズト信ズ今日女子ノ教育ヲ論ズル者復タ少シトセズ然レ𪜈多ハ學齢後ヲ説クモノニシテ其學齢前ヲ説クモノ至リテ少ナシ學齢ノ前後ハ自ラ物ノ内外ノ區別アルガ如ク學齢前ニアルハ即形以内ノ教育ニシテ學齢後ハ即形以外ノ教育ト云ハンカ余ハ寧ロ學齢前ヲ以テ教育ノ緊要ナルモノトス是レ余ガ其前後ノ別ヲ立テ玆ニ其前ヲ説クモナリ余ハ自ラ余ガ此ノ説ノ最モ平凡大ニ世ヲ益スルニ足ラザルヲ知レリ然レ𪜈我邦學ツテ之レニ比スレバ或ハ遙カニ此説ニ勝リタル教育ヲ布クモノアラン而多數ハ猶未タ此ノ凡説ヨリ下リタルモノナキヲ保ツ可カラズ是レ余ガ好ンテ今斯ノ如キ凡論ヲ吐ク所以ナリ

●叢話

○紅蘭小集を讀む

紅蘭は梁川星巖の妻なり余此頃その詩集を讀んで密かに感歎する處あり傳に云ふ紅蘭常に夫に隨ひて四方を周遊し名勝奇跡に出れハ互に唱酬して吟腸を和せりと又云ふ紅蘭常に其夫を稱して大丈夫となし之を人に語りて毫も愧るの容なかりきと其夫を愛するの風采ふ推知し得べし然れども紅蘭が心の奥にひそみたる濃厚の愛ハ只だその發して珠玉となれるものに就て之を悉すべきなり今その一二首を掲て之を示そ

寒夜侍外君

四隣人已定、燈火夜闌殘、雪迸月光白、雲隨風勢闊、家貧爲客久、歲晏怯衣單、鼓半把茶啜、思君吟坐寒、

湖村春鋤

年景含朝景、山煙帶水煙、風晴鶯鶴唳、草暖一牛眠、五畝卜不得、半生常泛然、誰家好夫婦、耕老傍湖田、

此他外君と同に梅を和州の月が瀬に見、外君に從て江戸に遊ぶ、と云ふ皆な吟咏あり或ハ蝶飛の圖に愛此貞魂兩不散、春風隨處作雙飛、と題し秋蝶を觀ても交飛雙舞態何工、なると咏し感慨するところ皆な其夫を思ふにあらざるはなし抑も伉儷の樂ハ人

間の至樂なり夫婦の愛ハ人世の眞愛なり此を咏じ之を吟じ更に可なり然るに東洋の騷客概ね淡泊世と出るの表を裝ひ妻女を度外に置くと以て高しとす故に筆を揮ふの樂あるときハ妻兒臥そと咏じ國と憂ふるの厄あるときハ妻拏亦不知と吟ぞ其吟咏に夫婦の愛情とあらハそもの甚だ少きは之が爲あり吾人は一誦三歎して斯愛と發動そるに足るものを要むるもの也

○西洋禮式　（第九）

食事の禮

一〇。食事の順序と常に第一を肉汁とし魚を第二とす

一一。肉汁を吸ふには匕を用ひ其側に口をつくべし且つ決して音を發そ可らぞ

一二。肉汁も魚も替りと望むべきものに非ぞ

一三。食物と受たるときも直に之を食ふべし余り熱きときは庖刀及び肉叉とをとりて食せんとそる用意を示すべし他人の食するまで待つとも啻に昔日の禮式なるのみならぞ今は非禮の事として見倣さるべし

一四。食物を受たるとき之と傍の人へ讓る等の事と爲す可らぞすべて如此き配分は皆な主人の細君に任ぞべし

一五。肉汁又は魚其他何物にても余り多く皿に盛る可らぞ此れ余り僅かを入るゝと同樣に失敬なり

一六。肉汁又は魚其他何物を食ふにてもそべて庖刀と口のあたりへ持來る可らぞ豌豆の如きも肉叉にて食ふべし菓子及びカレー又はプッヂング等みな匕を以て食ふべし

一七。松葉うどを食そるには他人の爲そ所と觀よ高等の人は指にて之をとり食ひ或は其の心を切り肉叉にてとり食ふもあり何れも式にのなへり

一八。櫻、李、などの果物を食ふとき其核は匕に入れて皿の上に出すべし然し手を以て口を覆ひそと核を掌よ落して皿の上に載する方他に見えぞして宜しからん要するに口より直に皿の上へ核と落す可らぞ

一九。口に含むときは決して談話す可らぞ

二〇。飲食の間に飲食の音ときかす可らす又た味よしとて騷ぐ可らず

二一。客人若し不幸よして皿を覆へし又も破るとき謝辞を述ぶ可らぞたゞ顔色に之を現はさバ足れり口にて弁ぞるハ禮にあらぞ

二二。家内の女ハ客人が食し了るのちならでハ決して皿を返し又ハ食了りたる体を示しなぞす可らぞ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

二三。後菓子を出したるのち十五分程もすぎたらば珈琲をまハすべし珈琲來りたるとき婦人ハ客間へ歸るべし

二四。時としてハ婦人にハ客間にて珈琲を出し紳士にハ食事のあと直に珈琲と出し且つ巻煙草を供ふ

二五。食事に酒とそふるとハ今流行せず以前ハ附添の紳士婦人へ對して酒をそゝめたれども今ハ決してなし

○言ハ行にしかず

かにかくと言の葉に措く露ハ輕けれども之を身に行ふハ最と難きとありされバ口に何如やど清げなる玉をハくとも其行狀之と均しからずバなか〳〵に卑しう思ハるゝものなり此故に基督は汝曹もし信ぜずば吾行によりて信ぜよと云ひ玉ひ孔子も亦た實行をもつて修業の目的とハ爲したまへり故に女學の何ものたるとをよく〳〵承知しながら何ほ其德の脩らざるも寧ろ之を知らずとも其行の反つて潔ぎよきに劣るとなり之につきて面白き話と云ふはむかしある人文盲なるものを異見して世の交ハ他の事ハいらず唯ゞ堪忍の二字をよく守るべしといへバ文盲の人頭をかたむけかんにんとハ四字にて侍らずやと指もてかぞへ御許の心違へなるべしかんにんと四字にて侍るといへバ異見せし人云ふ愚昧の人かな堪忍とたゞしのぶとよみて二字なりと云へバかの人又かうべを傾けたえしのぶならバ又一字ふゑたり五字となり侍るべし何と仰せありとも我等ハ四字とおもひ侍れば四字にてかんにんハ致し侍るなりといへるに其人又云ふ汝が如き文盲ハ實にさとしがたし人に似て蟲同樣なりおのれがまゝにすべしと大にい、い、い、きどほりけれバ文盲の人笑ひて何とも仰せあるべし我等はかんにんの四字を知り侍れバ惡口せられても少しも腹立侍らざるなりとて笑ひ居しとなり此異見せし人と文盲の人とハ何れかよく堪忍の字義を知れる文盲の人の愚なることと笑ふに堪へたるやうにハあれども其よく堪忍の德と實行するに至りてハはるかに異見せし人にまさると云ふべし之を此れ言は行にしかずとハ云ふなり

○夫婦の心得　（第一回）

夫ハ何如にその妻をあしらふべきか妻ハ何如にその夫を奉ずべきかこれ甚だ大切なる問題なり近來女道一變してむかしの如き壓制ハ甚だ不道德なりと定りたれバ夫ハ妻を下婢の如くし妻ハ夫を主君の如く思へとの教ハ最早何人も承知すまじさらば夫ハ文明の夫となり妻ハ開化の妻となりての交らふさまは悉く歐米の風に從へど云はんに是亦何人も快よくは承知せざるべし況んや今日歐米に行はるゝ夫婦の關係も皆必しも贊成すべき有樣に

あらざ其中の彼處ハ學びたし此處ハ止めたしなんど思ふも多かり又我國に從來行れたる關係ハ決して一朝一夕に廢すべきにあらぞ且つ實際廢し得べきにもあらずそのうち斯るハよろし此樣なるハ一日も早く除きたしなんど思ふも又多かるべし故ニ夫婦の交ヾ何如せんと云へる問題ハ今日甚だ大切なるものと云ふべき歟

抑も夫婦ハ相愛すべきものなりゆえに何如なる交も何如なる心得もみな此愛を增し愛をつゞけんとの目的に出でざれば到底其功あらざるべし然るに夫婦の愛とハ何如なるものなりやこの事明ならざれバ交心得も亦ともに判然せざるべし七月七日長生殿夜半人なく私語の時天に在てハ願くハ比翼の鳥地に在てハ願くハ連理の枝とならんとハ漢皇と楊家の女との愛なるべし。限あらんみちにもおくれさきだゝじとちぎりたれバ病重くともうちそてゝえゆきやらじと云へバいかまほしきハ命なりけりと云ふこれ御門と更衣の局との愛ならん。又てゝら二布して夕顏棚の下にすゞむも夫婦の愛なり。狩衣烏帽子して上﨟を負ひ雨風に百夜のかよひするも男に愛あり吾もこもれり夫もこもれりと怨じ夜半にや君が獨り行くと歎くもまた女の愛ならん昔し曲亭の主人が愛に上中下の三品ありと云へるハ必竟此樣の事なるべし

吾人此頃夫婦の心得を草せんとして暫く思を轉じ今たゞ其序開を述て玆に讀者に請ふ所あらんとするハ此ゆゑなり抑も愛にハいろいろ〳〵ありと云へバ隨て双方の心にかなふべき交心得も亦た各次第あらん故にたゞ吾人の愚考を述るよりも寧ろ本誌を愛讀さるゝ紳士貴婦人の双方に請ひ吾妻もし斯せバ滿足そべし吾が夫もし此樣にあしらひ玉ハゞ此上の幸なしなんど思ひ玉ふ條ハもとより斯るあしらひハ心地あし此樣のことハ一日も早く除かれたしなんど御身ニ經驗して考へ玉ふまゝを悉く報告あらんことを願ひ吾人ハ之を此の題內にとり集め時々卑見を加へ且つ此より歐米夫婦の情交をかきつゞけて現今ニ大切なる此問題を解くの備となし一ニハ夫婦がたの心得のたしともすべし

吾人ハ右の主意を知已二人三人に話して此等より得たる考を左にかゝぐ此義に付き投書ある方ハ文章など何如やうニてもよろしく成べく心のまゝを御知せあらんやう希ふ

○○

第一そべて女ハ何事にも口答せざれとの敎なりしより妾等ハ夫より何如やうのこと申さるゝともたゞ之を心に藏め又心に思ふとも口に出して答へ申さざかくて年久しきうちに胸の內何ものかの塊まりを生せしやう思ハれ苦しきと限りなく候あハれ世の夫たらん人切てハ優に心付を述べたまふて余りニかしましく頂よ

り叱りこらし玉ふな尚ほ亦た妻たるものゝ思ふことをも忍びて御きゝあるやういたしたし憂や悶やの思胸にかたまり居る人は妾のみにあらざとたぼに候と

○○第二となみの夫はまことに優しき質にて他人は皆な感心そるのことに候ひとく〳〵の評には斯る人の妻たらんものは何如に幸ならめなど申すほどなるに妾に對しては最と氣短かく快からぬあしらひ玉ふこと多きは何故よや妾にあやまちありとのことか

答。他人に優しき人は他人も亦之れに優しからんと思ひ上にも人の親切ならんことを要むる性質あり然れば茲に問ひ玉ふ方は夫に對してのあしらひ尚ほ足り玉はぬか又は御身自らさしで口したまふことの多きゆえなるべし

○○第三僕終日他所に出でゝ拮据黽勉し素より家内に留るものゝ苦勞に比すべくもあらざ然るにわが細君は僕の歸る迄で晩食を待たず已れ先づ之を了ることあり甚しきは僕の歸宅晩き時先づ床に入りて眠ることあり何如にまつものゝつらければとて外に在りて腹を空うし眠を忍ぶものゝ苦みに比ぶ可きにあらざらん願くは世の貴婦人がた決してかゝるあしらひを爲し玉ふ勿れ

編者白す。右問題につき投書さるゝ方は皆な其名を秘し玉ふべきに付き姓名は悉く省き其責任は一切吾人に擔當そ

● 佳傳

○江口の白妙珠玉を沈る話

むかし鎌倉の時代西國の武士に箱崎の太夫正方と云ふものありろれが子に小太郎安方とて生れ淸げに心ざま優に鄙には似ざりけるが京に出でゝ白妙と云へるものに親しみ相將て已が國に歸らんとし大物より筑紫の便船を求め所々に風を候て船中の九日菊もなかれば白妙一枝を請き其上に贊しけるは

解レ印歸來欲レ臥レ家、東籬無レ菊首堪レ爬、丁寧莫レ棄塵中種、恐是路傍媚レ客花、

小太郎見るに墨のきの霜葉奇よして白菊とや云はんなんぢ自ら謙して其語黃菊に及ばざわれ之を添んとて

船の上にともなふけふのかひに見る筆の露をく妙の白菊

かくて其古家のあたりまで歸りたれど京にて行跡あしかりしとて父親の大に怒り玉ふよしをきけば頓にも歸りがたく傭ふの家をかり受て共に住ひけりたゞ其親戚何某と云ふものゝ之に往來し時々小太郎と諫めて父の許に歸らせんとしたりけり茲に原繩とて其近邊よ住ふ浪人あり白妙を見て連りに戀ひしたひ小太郎との間をさかせんと思ひ計りの何某と召びて事甘く諛らひたるに何某はたゞ白妙と小太郎よりはなち小太郎と一日も早う歸參

ぜんとの親切あれバ原繩の言ふよしをきゝ入て小太郎を招き其父親の恩を述べておつく其の不孝を諫め早く白妙を去りて獨り歸家せよとすゝめけり白妙ハ小太郎が歸り遲きに心下せず酒を温めてまつ處へやをら歸り來りて其顏色樂まず酒をも飮まず枕につく白妙寄りそひて何ゆへにやと問へども長き息をつきて語らず只だ睡入にもだへ臥す白妙心ありせず其動靜に心をつけてゐも寢やらず中夜に至り今夜何をか爭ひ玉ふと問へバ小太郎彼を擁きてさと泣き言ハんとして言ハざると幾度泪腮につたひ流れ聲を內にのみて胸をさする白妙いよ〳〵驚き小太郎をわが膝に抱きて言を軟にして言ふ假初に馴て二年の程ハ久しきにあらねど千辛万苦をなめてこゝに至り火にも水にもなりて從ひ奉らんと心を引くそ殿の身の上に悲傷ありていかで知らずして過さんや小太郎聲をふるわし逢ひ見しより我を心にしめて今日に至るまでの情わするべきにあらず我かへす〴〵之を思ふに親なるもの嚴威にして物を容れず爾を具してあらバ不興あるすときなく我と爾と流落して夫婦の偶も保ちがたく父子の義も絕れてぬべし今夜かれ我を責ると理の答ふべきなく寸心剖るが如しと白妙きゝて一桶の水を頭よりそゝぐが如く左あらバ殿の心いかん小太郎いふ我と爾との間に髮を入るべきひまなければわれ自ら計を知らず彼れ（この親戚）我が爲よ一計をなせたゞ汝の從ふまじきとを恐る白妙云ふ心えぬことかな好ハかりごとならバ何の從ハざることあらん小太郎云ふかれ兼て此計を爲んため爾れ身を安んずべき緣を求るに津の國の入爾を引供して身のよせ所あらしめ其謝禮として都のそれに持參したる家傳の大刀刀列雕塡武の寶劔など錢にあてたる品々かへり來るべしと云ふわれこれを持て家にかへり老父にわび申さん左あれバ爾も終身のより所あり我も父母に歸すると兩便の計ひあれども爾と棄ると忍びがたしとかたりもおハらで涙さめ〴〵下る白妙いだきし小太郎を台撲と押のけて冷ゝ笑ふと一聲思はざりき殿かゝる英雄の魂あらんとハいざさらバいさぎよく此計ひとうけがひて此便を取ハづし玉ふな但し其太刀鞍そる〳〵殿の手におさまりて後此身別人に行べし必らず其人に欺るゝと勿れわらハ今日より君と房とわかち行ときに臨んで別をとり參らせんと少しもうれはしげなく其日より端の家に閉こもり人に面せず白日にも燈を点じて机により法華を拜寫して悶とやりけり　（未完）

〇アウガステンの母モニカの傳　（二）

モニカの子供數多ありしうちにアウガステンと云へるは才高く量廣くして後の望も深ければモニカは特に之をいつくしみ其結

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

婚を延ばさせてたゞ學文修業に力をこめさせたれば此事反つてアウガステンの名譽心を鼓舞し俗界のほまれを貪り民人を無學視し放言するところ不潔不正のこと多ければモニカは心を削るゝ如く覺え若しむかし徒らの非望を廢し早く之にめあはせて其心を温かにせしめしかば斯るあやまちもあらざりしをと思ひてはいとさらに身をせめらるゝやうにおぼゆるにアウガステンの談ぜるところ悉く罪の言の葉ならぬなければ遂には共にテーブルに椅るをも恐るゝほどとなりぬされどアウガステンは何如に心下りせしときと云へど何事にまれモニカの心付と請ふ有様なりしは母が平生の愛も見えてほむべき限なりき母は日夜神に祈禱しアウ

テンの罪に沈めるをうれふるの涙ハそのなみ〳〵れ母が其子に肉体の病あるをわづらふ涙よりも熱かりけりある夜母のいねたる枕元に天の使たちあらはれて汝何如なれバ斯く涙にくるゝやと問はれたり母ハ尙さらに歎げきて我子の罪に陥るもれに候と答ふさらバ心を安んぜよ汝のある如く汝の子もあるべしとなくさむると見れバ喜バしやアウガステンハ母と共に立ちてありけり、只見るとき夢破れて南柯のまぼろし憾むよたえたれど母ハふかく此を默示と信じて必ずかゝる惠のあるべしと望みたり之をアウガステンに話しきかせるとき彼は嘲りわらひていろ〳〵に非難せしが母ハ靜かに答えて否な後ちの日必ず其事あらんと云ひけりかく此夢の如くなりしハ果して何時の年なりや一年にあらず二年にあらず又四とせ五とせにもあらず大凡そ九年と經て初て其いのりの如くきかれ其夢の如く行はれたり此間晝となく夜となく母が涙をこぼちて其子の爲にいのりたる心の中ハ何如なりしか思ひやるだにいとかしこし」あるときの事なりき母ハ聖經に明ある賢達の僧正をとひて願うハわが子に御教ありて早く悔ひ改めさせ玉へと云ふに僧正の答ふるやうアウガステンは尙ほなか〳〵に敎をきゝ玉ふ有樣にあらず何人も先づ其心に自ら戰をなしたるのち初て神の道に入るとなり靈の芽ハ引き

さきたりとて發すべきにあらずたゞよく之を生長せしむるにあらんゆえにまづ尙ほ其爲すまゝに任せとき御身ハ引つゞき祈り玉ふべしアウガステン自ら讀むのうちに必らず自らあやまちを見出し申さんと云へりされど母は此迄でひさしく實れ年をすぐして其子れ罪れうちにむなしく暮らすを見てハ一日と雖も心と安んじまつべきにあらず僧正何卒早く之を導き敎え玉へと半バハ哭き半バハうらみて切なる願をまふせバ僧正之をハなまさんとてモニカ安んじて行き玉へ神ハ必ず御身を惠み玉ハん神ハかゝる涙のうちの子供をして死せしめ玉ふとなからんと云ふ此時母の心ハ雷の天ぐもを破りてろの上にひゞき下るやう覺えたりとのち〳〵までもアウガステンに物語りけり然れど此時より後ち尙ほ久しきがうちアウガステンの心改れりとも見ねど母が善しと思ひ眞と思ふ道よりはたえど遙かに離れてあゆみけりされバアウガステンがのちの日に云へる如く此母の心の血も日夜其涙にまざりて神への犧牲となりける

斯る上にアウガステンはいや更に惡念を決し母をはなれて遠方にゆたらんとせり此れモニカが悉く惡魔ありと思ふ人と交らんとて羅馬に行かんとなせるなり母は其子に追ひすがりて海岸に乞しりゆき强て之を留めたれバアウガステン一時のいつはり

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

を述べさらバ今夜は演說をきゝ同行の人はさきに出立させんと云へり嗚呼母がまことの淚も船をつなぐ力やなかりけん明る朝海岸に出でゝ見れバ其子ハ早くも出發し乘込だりと云ふ船の影さへ見へざりけり濱松斜にかたむけども行く人を招くにあらぞ千鳥群りとぶともわが子を說伏するの聲ハあらざるべし天晴れ波靜のよして望み茫々母の心や何如ならんされど茲に失ふハ即ち後に得るなり天父いづくんぞ此母の祈を聽き玉はざらん

●寄書

○婦人の德義

芝　中村由道

婦人改良の事は近來一般世人の注意する處となりて男子ハ務めて之を引き起さんとし婦人自からも力を盡して起らんとを望ミ久しく壓制卑屈の牢獄中よ繫がれ居たる同胞姉妹も漸くよして遠からぞ男子と平等の位地を保つとを得べき歩ふよ進ミたるハ國の爲め女子の爲め又男子の爲めに賀ぞ可く祝す可く又悅ぶ可きの進步と云ハざるを得す然れど其進步たるや僅々都會の內一小部分に止まりて其他ハ依然として舊の如く下等社會の如きに至りてハ其狀實に見るに忍びぞ繫獄の身を甘んじて外に自由あるとを知ら知らぞざれバ勿論之を望むとなく只黯然として貴重の日月を消やし居るハ實に憫然の至ならずや誰れか同胞を愛せざる者あらんや誰れか愛する同胞の斯る有樣に在るを見て愛ざる者あらんや誰れか之を憂ひて救はんとを思はざる者あらん予少しく感ぜる處あり筆を取て之を述べんとす一國の文明の度ハ其婦人の地位如何を觀察して後に直に知り得へしとは眞に依る可きの格言なり實に一國の文明ハ其婦人の大に助くる處にして婦人皆宜しきに叶ひ其婦人の本務を盡くすに至らバ其國民ハ實に幸にして智德進み學問開け產業起り体格も備はり思想も發達して遂にハ眞の開明の域に達するとを得可し然らバ社會に於て婦人の力ハ實に重大なるものにして開明の基礎と云ふも決して過言ハあらざるべし予は今婦人ら如何にして開明の基礎となるやに付て論ぜるにハあらず只夫人ハ如何なる力其基礎となるべきやに付て論せんと欲ぞ乃ち其德義なり婦人ハ德義は乃ち開明ハ基なり今我婦人一般の德義ハ如何其貴重なる地位に立つ事を得べき力ありや否悲哉到底其力なし〻答へざるを得ぞ（未完）

●寄書●編者白す。レビット夫人の日本姉妹に告ぐ、中島とし子の世の良人に望む、吉田京佐氏の婦人問答第三、中村由道氏の雨の日の歌謠、尾張津島あけ氏の女子敎育策、大江安之介氏の同上、瑛非蹉跎吉氏の同上川勝源三氏の看病婦の心得、和崎義路氏の婚姻風習等、正ニ落手仕候

社告

傍聽無料 演者 通辨
女學演説
万國婦人禁酒會書記 レビット夫人
島田かし子
但し傍聽は女子に限る

今度弊社にて右兩氏に請ひ明后十七日午後三時より木挽町二丁目厚生館卽ち舊明治會堂に於て女學の演説を開き候に付切符數枚づゝ本号配達の際共に差上候に付可成來聽有之度尚ほ切符不足に候ときは瀧山町六番地警醒社、通三丁目丸善、雉子町嚴々堂のうちに於て御受取有之度候

廣告

繪本 德川十五代記 全

右は安寶繁昌爲御禮無類特別元價にて發賣の書なり
定價二圓。特別減價七十五錢。西洋綴全一冊頗る美製本。帋數五百ページ。府外郵税二十四錢

本書今回一千部限り前記の非常特別減價を以て愛顧各位に頒つ●有志の方は郵便小爲替にて送金あれ已に製本落成に付き着金次第送本す若し着本延引する等のことあらし時は先拂郵便にて照會あれ●前記の減價は發賣日より廿七日限にて復價す

一讀百驚 珍事奇聞　小野寺孝吉君編輯
定價一圓。特別賣價五十五錢。府外郵税十八錢

本書今回一千部限り前記の特別賣價を以て愛顧各位に頒つ●已に製本落成に付有志の方は郵便小爲替にて送金あれば着金次第直に送本す●減價は發賣日より向ふ二十日間限りにて直ゟ復價す故に至急注文あれ

右二書出版發賣所　大坂區今橋二丁目卅九番地
書房集英堂

點取競文新誌

第一号四月十日發兌次号毎月五十の日發刊　帋幅通常大新聞と同じ

一枚三錢二厘○一ヶ月前金十八錢○三ヶ月前金五十錢○六ヶ月前金一圓○一ヶ年同二圓○郵税府内外を問はず一ヶ月六錢づゝ○前金到着の上ならでは郵送せず○郵便切手代用の時は一錢切手にて一割增の事○爲替御振込の時は東京神田區淡路町郵便局へ振込まるべし○見本御入用の御方は郵劵四錢御送附あらば速に呈すべし

右點取競文新誌發行の主旨は廣く世人の高文を募り本誌に掲載するものとす但し該文題は當社より出す○高点文より逐号掲載○最高点を得たる人には編輯人の見込により一ヶ月二十五人を限り無代價進呈す○購讀者三千人を限る○題外の文と御投書相成るも不苦併之掲載すると否とは當社編輯人の鑑定に任す○其他詩歌等を送らるゝも不苦○第一号に掲載すべき文題は第一(有形財產と無形財產と何れの貴きか)第二(我邦書生の前途何如)第三(交濟論)○

東京神田區紺屋町廿八番地
點取競文新誌社

無類特別元價發賣廣告
大全活用姫鏡
絹仕立和製美本正價金二圓廿錢製本既に落成す

貴女至寶

本書は有志加盟の諸君二千名を限り紙價實費金七十錢を以て加盟諸君に頒つ●加盟期限は七月三十日限りとす期限後は正價に復す●送金は凡て郵便小爲換にて送付を乞ふ●切手代用二割增●送本は七月十五日より着金の順序に隨ひ遞送す●送本延滯の節は郵税先拂を以て督促あれ

●勉め勉めよ女子諸君○勵みよ勵めよ婦人諸子○讀めよ〱此書と○進み行く世の今はしも○貧富貴賤は只管に○學ぶと學ばざるとにあり○今此書は御身等の○必ず讀むべく學ぶべき○事を漏さず載せたれば○姫鏡てふ書の名よ背かぬ貴女の至寶なり○其体裁を尋ぬれば○平假名附て讀み易く○挿畫加へて解し易し、○彫刻も今世に流行ぬる○銅版なれば文字も畫も○最と明かに鮮かに○便利の爲に製本も○懷中すへき小本形○固く仕立て紙も亦○舶來品の極上に○極々上のインキにて○上は錦よ綾表紙○先其中の概略は○大別廿又餘件○小分三百五十條●今其一二を陳へんには○袷に單衣綿入の○綿の入れ樣仕立方○羽織に袴シヤツに帶○半纏其他種々の○紋の附やう刺し繡し○凡七十

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

余條あり●禮式の部ハ御身尊の○起居擧動言葉つき○送迎受授に配給仕○燭臺火鉢莨盆○茶菓の置樣進め方○眞行草の區別迄○大凡四十又餘條●修身の部は親と子と○同胞親族夫婦又○友用下男下女迄○五に守り盡すへき○家の營み治め方●和言の新と舊○優にやさしき言の葉の○用ひ方迄聊かも○漏さす載せて詳らなり●和歌てふ部にも敷島の○道れ起りも書樣も○詠樣れミか古の○範となるへき歌もわまつ濃茶薄茶の点方や○俗方手前咲樣も○細かに示し擧置ぬ●活花の部ハ順序より○花依も分て天地人○水揚枝の撓め樣○床の陰陽花配り○眞行草も說明し●熨斗に短冊筆に墨○重ねて扇雌雄の蝶○總ての物の包み樣○世よ珍らしき折形も○集て卅余條わり○五行結の裏表○ト鋸吾妻相生の○秘の緣の蝶結び○蜻蛉結びも取交へ●化粧の部にハ月の眉○花の顏せ色を增○光と添る白粉の○途樣其他湯を使ひ○髮の結樣又眉の○作り方迄美婦人の○美に美と加か秘方わり●紅曲唱歌ハ琴よ三味○歌加留多なり貝ハ、い○一彈人の氣を齋ひ○半曲鬼を泣しむる○千万無量の妙味あり●四季用文ハ新年の○花見月見に吉凶に○時候見舞の文の範○人倫自他の稱へ方○月の異名や文字盡し●又婚姻の大意より○結納興入れ部屋見舞○四惡十惡相性や○忌詞とも擧尽し○妊娠中の身持方○產前產後の養生や○子供育の道標●家の其の臺所○ろと取締る規則より○衣服の器の扱ひに○飲食物の扱ひや○雜費の出入扣へ方●料理の部にハ和と洋の○二ッと始め時に迪れ○變る許多の献立も○四季番菜の趣向わり●鉄氣や汚を除き去○萬の虫を驅尽し物の腐取と止る法●萬の物の漬樣も●貯へ方の秘事奇術●染物の部ハ新工風○好の儲に紺も緋も○緣紫手染法●妙藥の部ハ目前○痛を止め紙も亦つ撩して急よ救ふ法●最後に女子の紋所○常世風の離形と○許多集めて揭けたる●世にも得難き書なれは○母も娘も姉も亦○妹も妻も苟くも○女ゝ生れ來し者れ○皆諸共に繙きて○讀めよ讀め〳〵此書を○小形ふれ共此書ハ●賢母を造る學校ぞ○金のなる木ろ田ろ畑ぞ○御身等の父ろ母ぞ師ぞ○拔けよ拔け此の書を

發賣本部　弘文堂本店

大坂北區筑前橋北詰東へ入

定價

一冊○	四錢	郵稅○一錢	（但府內無稅）
十冊○	卅八錢	郵稅○十錢	（同前）
廿冊○	七十錢	郵稅○廿錢	（同前）
卅冊○	一圓	郵稅○卅錢	（同前）

一ヶ月分女學雜誌代價	十二錢	府外〃十五錢
二ヶ月分同	廿四錢	府外〃三十錢
三ヶ月分同	卅六錢	府外〃四十五錢
半年分同	六十四錢	府外〃八十二錢
一年分同	一圓二十錢	府外〃一圓五十六錢

廣告

一行一回（廿八字詰）	前金拾錢	
同三同以上	一割引	
同六回以上	二割引	

但し不道德なる事物の廣告を謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評を

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町（大賣捌）　巖々堂

東京神田區雉子町　國々社支店
同　神田區佐柄木町　東海堂
同　日本橋區新葭町　眞明堂
同　日本橋區馬喰町二丁目　自由堂
同　京橋區木挽町壹丁目　萬字堂
同　本郷區元富士町　盛春堂
同　本郷區春木町二丁目　解明堂
同　牛込區肴町　活神堂
大坂備後町四丁目　岡島支店
伊勢國松坂白粉町　家里初枝

東京芝西久保櫻川町（支局）　萬春堂

發行所

東京本郷區弓町壹丁目廿番地

本局　女學雜誌社

持主兼印刷人　瀧田正義

編輯人　巖本善治

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY